

基督教の世界観はその系統を窮むれば、イスラエル民族の宗教思想にその根を深うするものなれども、基督に由つて一大紀元を作り、由來一千九百年の長年月を経て發達したものである。この世界観は單に研究を旨として贏ち得たるものではない。基督より沸き出でたる靈的生命の奮闘によつて啓發し來れる思想である。故に先づ以て基督及其弟子に由つて啓發されたる思想を簡單に陳ぶる必要ありと思ふ。

イスラエル民族に由つて贏ち得られた一元主義は基督も之を繼承せられたのである。イスラエルよ、爾曹の神は唯一の主なりとは、絶對的に肯定した一元主義である(申命記六の四)。世界萬有は悉く皆唯一の神に造られたるものと觀たのである。彼の多元主義又は二元主義は絶對に之を否定した。ペルシャ教の

影響を受けて、イスラエル民族の思想は二元主義に傾き、アリマンの如きサタンの存在を認むるに至つたなれども、此魔王は固より神に對立すべき權能を有するものではない、地上に於てこそその權勢を恣にするを得たれ、畢竟神に征服さるべきものであれば、終局は一元主義の勝利となるのである。基督は自然界を以て詛はるべきものと見ず、天父の保護と恩愛との充實する所の世界と認めたのである。二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに爾曹の父のゆるしなくば、その一羽も地に落ちることあらじ、爾曹の頭の髪また皆かぞへらる（馬太一〇の二九、三〇）、天空の鳥を見よ、蒔くことなく蒔ることをせず、倉に蓄うることなし、然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり（馬太六の二六）、野の百合花は如何にしてそだつかを思へ、つとめず、つむがざるなり、我れ爾曹に告げん。ソロモンの榮華の極の時だにも其装ひこの花の一に及ばざりき（馬太六の二八、二九）。自然界を樂觀したる基督は萬有の中に於て神の恩愛を認め

之を喜んで享け、而して自然界を通うして神に交つたのである。天父の一視同仁を證するには、彼はその日を善き者にも悪き者にも照らし、その雨を善き者にも義からざる者にも降らし給ふといふ（馬太五の四五）。彼は天國の状態を語るに、自然界にその類似を見出したのである。固より自然界そのものを以て天國と認むる譯にはあらざれども、彼は自然界を以て能く天國に類似する所多しと觀たのである。彼が觀た自然界を一貫する所のものは、乃ち一元にして多元を容れない。天地創造の際惡魔がその惡種を蒔いたといふが如き二元的の色彩は、毫も之を見出すことは出来ない。又世界には折り折り天變地異あつて、多くの生物をなやますことありと雖も、基督は之を惡魔の所爲となさず、同しく一元の所爲と觀たのである。此の如き世界觀の一面は吾々之を舊約聖書に徵することが出来る。けれども舊約聖書中にある超絶神教の種子は基督の時代に於てその絶頂に達し、神は萬有の上に超絶して殆んど之と關係なきもの

やうに考へたのである。基督は之に對し、我が父は今に至るまで働き給ふ、我も亦働くなりといつて（約翰五の一七）、此の懸隔を打破した。舊約聖書に神は六日間にて天地萬有を創造し給ふて、第七日には休息し給ふたとある（創世記二の二）。之は安息日を旨として立てたる教訓の基礎となりたるものであるが、自然此の如き思想は超絶神教の影響を受けたるものといはねばならぬ。基督は之に對し、神の活動が永遠にして、毫も間斷なきを肯定した。基督の眼底に映ずる天地萬有は間斷なく永久に活動するのみならず、その活動は時計の動くが如きものにあらず、間斷なく神に動かさるるものである。ヨハネは基督の世界觀を説明する爲めに、萬有に偏在するロゴス即ち生命ある道理を高調して居る。此説明によれば、天地は神の道理の發現であつて、理性を有するものである。斷じて無明ではない（約翰一の一四）。

新約聖書は自然界が同一の天父に支配せられ、同一のロゴスに充實する光明

の天地たるを肯定するのみならず、更に尊く光明に照らさるゝ世界を豫想して、現世界はこの來るべき理想界の準備であることを主張するのである。現世に於ける様々の不調和と認めらるゝもの、難解と考へらるゝものは、この尊い理想界に照らして調和を見出し、又難解に對しては希望に滿つる説明を與へたのである。之を要するに新約聖書の世界觀は一元の神に世界の紀元を置き、一元の道理に充實する萬有を認め、又光明に充ち溢るゝ理想界を實現せんと欲して、萬難を排し、千苦を凌いで奮闘勇戦しつゝある所の靈能を肯定するのである。新約聖書は宇宙を物質の器械化したるものと見ない、神の靈の充ち滿つる活躍の世界と觀たのである。

斯の如く論ずれば、基督の觀たる天地は飽くまで樂觀すべきであつて、毫も悲觀すべき所はないやうであるが、斷じてさうではない。基督の世界觀はさう淺薄なものではない。彼は人類世界を襲ふ所の病魔を觀て悲しんだのである、又

貧富の懸隔、貴賤の弊習、破壊的罪惡の横暴、僞君子の驕慢、國家社會の衰滅等を見て、痛切にその心を悩ましたのである。彼は一見樂觀の人とは思はれなかつた、悲觀の人と見られたのである。けれども彼は是等罪惡の横暴を見て、必ず征服し得べきものと信じて、勇奮邁進したのである。彼は無論罪惡の原因を神に歸するが如き考へをその念頭に浮べなかつた。左ればとて之を惡魔に歸した譯でもない、彼は極めて實際的の眼光を以て之を觀、神の靈を以て全く征服し盡すものと信じたのである。否神の榮光をあらはす機會と見たのである（約翰九の三、同二の四）。故に彼は地上に於ける神國の建設を祈り、又之れが爲めに奮闘し、自己の使命を重んじ毫も撓む所なく、猛然として前進したのである。又彼は凡ての人に戰闘準備をなさしめ、その生命を棄つる者は之を得ると聲言したのである。基督の弟子は彼の十字架に於て宇宙の最も悲觀すべき一面を深刻に自覺したのである。此の大なる悲觀はパウロに由つて最も徹底的に言ひあ

らはされた。彼はその肉體の苦痛を激烈に感じたのである。彼はその肉體の救済を哀願した（羅馬八の二三）。彼は肉體の苦痛に悩んだのみならず、肉情と良心との衝突より來る所の煩悶を痛切に自覺し、嗚呼我れ惱める人なるかなと號泣したのである（羅馬七の二四）。彼れは此等肉體と靈との苦痛を以て、凡ての受造物の苦痛であると觀た（羅馬八の二二）。のみならず彼はその深い内觀に聖き悲痛の激烈なるものあるを意識した。即ち聖靈言ふべからざる悲歎を以て我等の爲めに祈るといつて居る（羅馬八の二六）。此の如く内觀と外觀とを一貫して、そこに堪へ難い苦痛の存在するを悲鳴して居る。しかも彼は世界を詛はなかつた、厭世の態度を取らなかつた。その故は彼れ天の恩寵により驚くべき靈能が彼れ自身の内心に勃發したるを自覺し、同一の靈能に由つて有りとあらゆる内心の矛盾を征服し、義と和と聖靈に由れる悅樂を贏ち得たのである（羅馬一四の一七）。彼は同一の靈能に由つて、外界の壓迫に對し、優に戰勝者たるの

人格を獲得したのである。けれども彼はその偉大なる理想にあこがれ、決してその期待する目的に到達したとはいはぬ、凡てうしろにあるものを忘れ、前にあるものを取らんと奮闘した彼はこの一事をなして勇進するを知つて、退却するを知らなかつたのである（腓立比三の二―一三）。故に彼は榮光の希望に生きて患難にも喜ぶことをなし、患難は忍耐を生うじ、忍耐は練達を生じ、練達は更に希望を増し加ふといつて居る（羅馬五の四―五）。彼は當時の賢哲と等しく人類の墮落を信じ、祖先の罪惡の詛を認めて居つたけれども、基督に由れる救済に由つて、凡て是等の苦境より免れ得ると揚言した。基督の福音は世界を此の苦境より救ふ所の力たることを聲言して居る（羅馬一の一六）。凡ての事は神の旨に由りて召されたる、神を愛する者の爲めに悉く働きて益をなすと概括して、その世界觀の概要を示したのである（羅馬八の二八）。

ヤコブ書もペテロ書も黙示録もヘブライ書も世界に於ける大苦痛を叙し、而

して毫も神の實在を疑はない、又悲觀の苦境に陥つて居らぬ。何んとなれば是等の苦痛は義人を鍛鍊するものにて、終局は神の國の勝利と達觀したからである。彼等はこの恐ろしき舞臺の外に立ちて、活劇を傍觀したるにあらず、自から進んでその舞臺の人となつて、惡戰苦闘したのである。彼等はその内觀の靈能に導かれ、戰勝の疑ひなきことを見透したのである。彼等は世界全體を誼ふべきものとは見なかつた、その一部に誼ふべきものあるを認め、之を征服して、世界そのものを救ふべき使命ありと信じた。故に最後に神の國の勝利を望み、戰勝者の平安をその心底に贏ち得たのである。新約聖書の著者は時代思潮の影響を受けて、人類の墮落を悲んだものなれども、その内に深く實驗する所の靈能に照らして、基督の出現が世界人類の大開展を意味することを會得したのである。何んとなれば始祖アダムと基督とは年を同うして語るべきものではない、前者は戰敗者にして後者は戰勝者である。前者は罪ある人類の始祖にし

て、後者は罪なき新人類の始祖である。そこには驚くべき階段がある、モーゼや多くの豫言者は基督に達するまでの多くの階段であらねばならぬ。パウロが肉なる者先にあつて、靈なる者が後に來るといつたことは(哥林前一五の四六)確に人類の發達を意味して居る。希伯來書の著者はその書の冒頭に於て「神昔は多の區別をなし、多くの方を以て豫言者により列祖に告げ給ひしが、この末日にはその子に託りて我儕に告げ給へり」といつて居る。ヨハネ傳の著者もその總論に於てロゴス顯現の次第を述べて居る。新約聖書は一面に人類の墮落を叙すると同時に、天啓の發展を示して居る、而してこの發展の歴史は竟に墮落の歴史に勝つことを示す。而してこの靈能の發展史は取りも直さず、基督教の救濟史であつて、結局大樂觀に終るべきものである。

前段に述べた所の原始基督教は實に人類が悲觀の窮境に陥つたる時代に宣傳されたのである。印度の宗教はそれが婆羅門教たると佛教たるとを問はず。人間

界の苦痛を説き、大悲觀の世界を高調して、等しく此の世界を無明となし迷妄と觀たのである。彼等は絶對的に之れを惡なりと斷定し、人類をして之より遠離せしめんと奮闘したのである。ギリシヤ人はもとく自然界を樂觀し、人生を享樂したのであるが、時代を追うて失望し、悲觀し、厭惡し來つたのである。彼等のうち思想ある者向上心ある者は、現世より離れて來世の幸福を獲得せんと要求し始めた。ユダヤ人の如き本來現世的宗教に熱中し、その祝福に満足して居つたのである。が悲運は重ねて國民を襲ひ來り、彼等は殆んど浮ぶ瀬なき有様となり、遂に現世に失望して超自然界にあこがれ、世界の末期、人類社會の滅亡さへ豫言するやうになつたのである。當時は見渡す限り、人類世界は大悲觀の苦境に陥つて居つた。是等の大悲觀に對し、基督教は若かくしい元氣を懷いて顯はれて來たのである。當時の世界觀は押なべてこの悲境から觀た所のもので、神靈と物質との二元説を高調するにあらざれば、神より次第く流

れ行く世界を觀する流出論を主張したのである。前者によれば物質は本來無明であつて、罪惡の原因である。この見るべき世界は物質の横領し跋扈する所であつて、結局厭ひ棄つべき所である。人類の心底には神より受けたる靈光あれども、物質は之を蔽うて壓倒して居るのである。故に之より解脱する道は冥想と苦行との二つあるのみ、結局遠離する外はないのである。苦行に二種ある、一は禁欲主義にして、一は放欲主義である。禁欲と放欲とは正反對なれども、等しく肉欲を滅ぼす所以である。放欲の極は無欲に終るものであるから、思ひ切つて放欲するを旨とするのである。流出論は結局墮落となるのである、よしや源流は清かなるとも、次第を追うて濁るのであるから、結局無明となり罪惡となり終るのである。故にこの無明は必然的のものにして、救ふべからざるものである。此世界は宇宙の末流である、その無明なるは如何ともなすことは出来ない。故に此の世界より遁げ去る外はないのである。基督教は是等二大無明主

義に對して、宇宙創造論を主張し、流出論に對しては神の意思の自由を論じ、物質原因論に對しては、創造論を高調したのである。宇宙は神の自由意志により無より創造されたるものにして、神とは全く別々の存在を有するものと主張した。

この世界観は物質の永遠性を否定し、一元主義を固守し、更に無明に陥るべき必然性を否定し、自由意志を確立するものなれば、一元主義を保全する點に於ては大に賞すべき價値あれども、物質を無明と認めた當時の厭世思想は矢張り固着して離れて居らぬ、唯この無明界より永遠性を奪つて有限のものとなした。これは大に賞すべき所である。けれども既に無明界を肯定する以上は之を脱却せねばならぬ。さらばその脱却の方法は當時の厭世主義の冥想と苦行とによらねばならぬ。神の國は此無明界に顯はるべく、又建設さるべきものではない、此無明界を脱離するにあらざれば、神の國には入られないのである。此世

界観は深く人心を支配したるものにて、綿々傳統して中古を襲ひ、中古人をして二元論の間に呻吟せしめたのである。又この無より有を生ずるといふは、大奇跡にして、如何に神が全智全能なればとて、道理に照らして考へられ得べきことではない。のみならず無より有を造ること可能としても、本來が無なる故に、復無となるべきものである。故に有そのものが確實なるものとはいへない、結局虚妄とならざるを得ない。故にこの無より有を造るといふことは不合理たらざるを得ないのである。オリゲネスの如きは此大なる缺陷を看取して、世界の永遠性を主張したのである。之はノスチック派の物質永遠論でもなければ、又萬有流出説でもない。オリゲネスはロゴスの永遠性を主張した、若し夫れロゴスが永遠に神より生るゝものならば、世界創造の原動たるロゴスの存在する限り、世界はロゴスと偕に存在すべきである。別言すれば世界は永遠より創造さるべきものである。此の主張によれば、世界の状態は千變萬化すること

あるとも、その存在は永遠でなければならぬ。さらばロゴスに始めもなく終りもないやうに、世界にも始なく又終りある筈はないのである。オリゲネスの卓見は驚歎すべきものなれども、彼も全くは時代思想を超越すること能はずして、この世界を以て墮落の世界と見たのである、乍去流石に彼はロゴスの信者であつた故に、此世界が聖化され、その全部が全く救済を受くるに至ることを主張したのである。

基督教はもと古代の天文學に由つて定められた地球中心説の上にその世界観の舞臺を築きたるが故に、此天文學が近世の始めに於て破壊されたる時に、大なる動搖を感じたのである。それまでは世界を天上、地上、地下の三界に區別して居つたので、天上を神の世界となし、地上を人類の世界となし、地下を死者の世界となして居つた。是等三界は太陽中心説の爲めに全く破壊されて、神の存在そのものすら危機に頻した。乍然之は基督教思想の進歩に大なる紀元を畫し

たといつてよい。基督教は神の内在を主張したれども、三界説の存在する間は、神の存在を天上界と定むるが故に、その偏在を認むること甚だ六ヶ敷かつた。然れども既に三界が破壊された以上は神の存在は勢ひ世界の中にあると見るか、又は世界の存在は神の中に見ねばならぬやうになつた。茲に於て神は靈なりといふ眞理が甚だ明瞭となつて來た。昔時は天を仰いで神を拜したのであるが、今時は至誠を内觀に集中する必要が認めらるゝやうになつた。しかして世界の舞臺は實に無限となつて來た。昔時も天則は見出されなかつたではないが、天體の運行が明確となつて來たので、人々が自然界の法則を重視するやうになつた。昔時は神と天使との意志に専ら重きを置き、天則は顧みなかつたのである。然るに法則は殊の外に重要視せられ、原因結果の理法は深く人心を支配するやうになつた故に、神の攝理の範圍が愈々狭められたやうに思はれた。先づ以て神は世界の大原因として認められ、而して宇宙の日常は第二原

因にて支配せらるゝと考へ始めたのである。之に加ふるにダルウキンの進化論の如きが廣く行はるゝやうになつて、愈々以て神の活動は事物の元始のみに必要となり、それすら不必要と認めらるゝやうになつて來た故に、宇宙は神靈を要しない所と考へられたのである。之を要するに宇宙の存在に必要なは法則ばかりである、神の存在は認むる必要がないといふに至つた。

此の自然主義に對し、基督教は合理的に活動する神を肯定し、宇宙が無意味のものにあらずして、深遠なる意義あり、又大なる目的を實現せんとして進行しつゝあるを主張したのである。意志と智慧とを有する神に宇宙が創造せられ、又同一の神に保護せられ、統治せらるゝといふは、昔ながらの世界觀であるが、世界を物質界とのみ觀る傾向は、世界を以て神より獨立したる一の存在であるかの如く思惟するのである。故に神と世界との二様の存在を認めねばならぬから、世界の出來事を神業と觀る譯にはゆかぬ。神は必要に應じて時々世

界に降臨し給ふと觀たのである、殊に人類墮落の爲めに世界は破壊され、神の經綸は失敗に終らねばならぬ状態となつた故に、神は新に一策を設け、救主を地上に降し給ふこととなつたと論ぜねばならぬやうになつた。斯の如き世界觀は近世に至るまで繼承されて來つたのである。然れども古來傳へ承けたる世界觀の眞髓は近世に至つて愈々その眞價をあらはしたのである。先づ世界を純然たる一元主義の上に立つることである。昔時より光明界と無明界との二界に區別して、或は二界別々の存在を主張し、或は二界混淆の存在を肯定する人々もあるが、基督教は斷じて此の如き區別をなさない。世界は神の創造し給ふ所にて、一毫も神以外より要素を注入せざるが故に、神の意志以外のものは何をも加へないのである。神が無より世界を創造し給ふたといふは、甚だ不合理のやうなれども、之は神の意志の外何をも加へないといふを極言したるものに外ならぬと解すれば、その主意は徹底して居るのである。基督教は神を愛なりと信

ずるが故に、神の意志は最善であらねばならぬ。シヨウベンハウエルが宇宙の根本を意志と見たことは基督教と相通ふなれども、之を愛と見ざることが大に相違するのである。然るに基督教は絶對的に神は即ち愛なりと斷定する。又神は即ち智慧なりとは太古より繼承したる信仰なれば、宇宙は愛に根さし智に照らされたる意志に由つて創造されたといふ譯なれば、神が之を善なりと自讃されたといふことは、基督教の本義でなければねならぬ。基督教の立脚地より觀れば、宇宙は善なりと樂觀するより外はないのである。又世界は神に保護されて居るとの思想の眞髓は、世界が瞬時も獨立するものにあらざるを意味するのである。世界は一旦神に創造せられて獨立となり、然る上にも保護されて居るといふが如き意味にあらずして、時々刻々神の意志にてその存在を保全して居るといふ意味である。別言すれば宇宙は神の活動にてその存在を有するものにて、常に創造されつゝあると觀るが至當である。宇宙は徹徹尾尾神の中に

その存在を維持して居る。その活動の大なると小なるとを問はず、悉く皆神にその根を深うするのである。又神の統治は萬有の部分々々が活動し、相互に衝動し接觸し、而して全體の調和を取つて、大目的に向つて進行しつゝあるを意味するのである。基督教は世界が開展し行くを認む、その最終の大目的を神の國とするのである。基督教は地上に於ける人類の顯現を以て天地創造の冠冕と觀、神は之を以て最善なりと歎美し給ふたのである（創世記一の三一）。故に萬物進化の如きは、それがダルウキンの進化主義によるとするも、又はラマークの進化主義によるとするも、最もよくその世界觀に適合するものとなす。以上の二大進化主義が内外相呼應して萬物をして進化せしむるといふが如き、基督教徒の意識に照らして最も興味ある所のものである。彼の天則といふが如きは、別に獨立の存在を有するものにあらず。故に物力に附著して居るかの如く想像するものもあるが、基督教の世界觀に照らして見れば、神の公明なる愛の意志の

活動に外ならぬのである。別に法則といふ存在あるものにあらず、若しありとすれば、それは抽象したる概念に外ならぬのである。進化の天則は神の活動そのものに外ならぬ。此の如く神の内在を高調するときは、勢ひその超在を否定せねばならぬやうに考ふる人もあらうが、決してさう考へねばならぬ必要はないのである。何んとなればこの世界は現在のまゝにて將來なきものではない、宇宙は時々刻々創造されつゝある、その創造されつゝあるは、神が宇宙以上であることを證するものではなからうか。宇宙に顯現し來らぬものが何程あるやら知るべからず、こゝに神が宇宙を超越し給ふことの證據を認むるを得るのである。現在の世界はそれ自身より更に内容豊富なる靈能を根柢として、その存在を有するのである。こゝにその樂觀の根據が堅うせらるゝのである。

斯の如く論ずれば、宇宙は只々樂觀すべくして、毫も悲觀すべき所はないやうであるが、實際世界の生活を觀れば、寧ろ悲觀すべきことの多くして、樂觀

すべきことの少きは篤信家の心情を惱ます所である。愈々純全の神を信じ、その創造を信じ、その内在を信じ、その統治を信ずれば信ずるほど、宇宙に悲観すべきことは多くなつてくるのである。然れどもこゝに基督教の元氣が潜在する祕密の藏を見出すことが出来る。宇宙は人々の眼底に映ずるが如く、果して悲観すべき不完全の實在であらうか、基督教はこの不完全に見ゆる宇宙が多くの完全なる存在に由つて成立つことを觀過することは出来ない。基督の愛せられたる野の百合花はそれ自身に於て果して不完全であらうか、その一羽も地に落されない大空の小雀はそれ自身に於て果して不完全であらうか。特に基督より祝福を受けた所の無邪氣なる小兒はそれ自身に於て果して不完全であらうか。斷じてさうではなからう。是等は一々完全といはねばなるまい。然れども花の完全は鳥の完全に異なり、小兒の完全は大人の完全に異なり、人の完全は鳥獸の完全に異なるのである。花にも千差萬別の種類がある、鳥にも千差萬別

の種類がある。之を概括すれば、現在の世界はそれ自身に於て完全と觀ねばならぬ、けれども過去の世界に比すれば、その完全に於て遙に優等なるものといはねばならぬ、その如く現在の世界は之を未來の理想界に比すれば、亦遙に劣等なるものといはねばならぬ。而して世界はより低き状態より進化してより高き状態に向つて上進しつゝある。人の内觀には既により高き理想界の陰影が宿つて居る。この理想界の種子が開展して來るに當つて、現在の世界と衝突せざるを得ないのである。こゝに大なる悲劇を生ずる。此の理想界を實現するに於て進歩するものは是れ善にして、こゝより退却するものは是れ惡である。此善惡の衝突は大なる悲劇を形作るに至る。けれども是等の悲劇に由つて、更により高き完全は造り出さるのである。基督の世界觀は實に左の言に由つてよくいひあらはさる、曰く爾曹は哭き哀み、世は喜ぶべし、爾曹憂ふるならん、されどその憂は變りて喜びとなるべし、婦女子を産んとするときは憂ふ、その期い

たるに因りてなり、されど已にうめば、もとの苦みを忘る、世に人の生れたる喜びによりてなり」(約翰傳一六の二一、二二)。道德の見地より觀れば、現在の天地は極めて不完全と思はるゝ。こゝに義人の幸福を見出すことは出来ない。何んとなれば人は道義の世界を造りつゝあるからである。天道是非の歎は淺薄なる世界觀に基くものにして、道義界を既に完成したるものと想像するからである。又千差萬別の世界は相互に深い關係がある、單獨に之を切り離してはその意義は明白とならない。地球は植物界と關連してその意義を發し、植物界はまた動物界と關聯してその意義を深くし、是等各々は人類界と關連して始めてその意義を明にすることを得る。そのやうにこの人類界はより高き神の國に照らして、始めてその意義を明確にすることが出来る。基督教の世界觀は此の大目的を目安として立てたるものなれば、近眼者流には到底解すること出来ないのである。然れどもクリスチャンに取りては之れほど明確なるはない。神はその

の不變の愛なる意志に由つて、此の理想界を實現せざれば止み給はないのである。

斯の如く觀來れば、彼の奇跡の如きは日常神の世界に見るべき者にして、斷じて超自然的でなければならぬ筈はない。道義的の宇宙を造らんが爲に、現在の宇宙が奮戦苦闘する所に、神の大奇跡は之を徴する事が出来る。即ちあらゆる世界の衝突を包擁して、一大調和の中に集注する宇宙の靈能と偕に活動する所に人類の使命が認めらるゝ、人類は此理想界を創造するに由て、道義界と共に完成せらるゝのである。

基督再來論

近時日本にてキリストの再來を高唱するものもあるが、之れは怪むべきことではない。此の如き主張は歐米に於ても古來珍しからぬことにて、世界の大動亂に際し、起らざるを得ざる一種のユツトピアに外ならぬのである。形式によれば妄想に相違ないが、其の中に偉大なる眞理が含まれて居るので、強ちに冷笑し去るべきではない。この想像は兎角ユツトピアの流行する時代に起りたるのである。けれども基督再來の希望は淺からぬ根據を有するが故に、面倒なれども之れを評論して見やう。

ユダヤ民族は由來理想に富むのみならず、之れに熱中する感情性を有するのである。この理想は彼の宗教心と深い關係を有する。彼の神は隣國の神と同じく、民族の神と思惟されて居つたのであるが、間もなくその眞相をあらはし來つ

たのである。真相とは外ではない、彼の神は天地宇宙の神であり、世界萬國の神であつた。此思想は無限の内容を有する。若し夫れ彼の神が一家族の祖先であり、一町村の氏神であり、又は一國の祖神であつたならば、その家族、その町村、又はその國を超越することは出来なかつたのであらう。それは必ずその家族、その町村又はその國と偕に滅亡すべき運命を有したに相違ない。祖先崇拜はその發展の程度に於ても自から限りがある。然るに一神教の神はその内容が無限であるやうに、その發展も亦無限である。この神の思想は家族を超越し、町村を超越し、國を超越し、又時代をも超越するのである。又人の道義性に基く倫理的完成も將來を期せざるを得ないのである。斯の如き倫理的宗教は大なる理想を喚起し、その實現を要求するが故に將來を豫期せざるを得ないのである。この將來は果して之を現世に求むべきか、又は死後の幽界に求むべきか、多くの宗教は之を死後の幽界に求めたのである。然るにユダヤ民族の識者はそ

の同胞の思想を飽くまで現在に向はしめた。人々が幽界に興味を注ぎ、神秘の世界に侵入したがるは、世界推し並べての通弊である。ユダヤの識者はこの通弊を矯正するに於て、その努力は少々でなかつた。彼等は政權と協力して其目的を達し得たのである。故にユダヤ民族の宗教は死後の幽界を探究するにあらずして、國家社會の將來に大なる重きを置くやうになつた。ユダヤの豫言者は印度支那の聖人の如き死後の研究に力を消耗せずして、地上の將來に向つてその想像を逞うし、國民の輝ける將來に熱中したのである。従つて彼等は豫言せざらんと欲するも得なかつたのである。ユダヤの豫言者は無限の道義力を信じ、又その心裡に存する無限の道義的責任を自覺し、神の國の實現を豫期したのである。この思想は時代を追うて發達し、之に對する熱中も切實となつて來た。彼等が神の國の思想は何の形式を取つたかといふに、紀元前一千年のダビデ王とその治世とであつた。彼等は之を理想化したのである。支那の賢哲はこの王

道の理想を過去に求めたのであるが、ユダヤ人は之を將來に求めたのである。支那が過去崇拜者であつたやうに、ユダヤ人は將來崇拜者であつた。ユダヤの經世家はこの理想的將來の準備にその全力を盡したのである。彼等はその理想の實現に對して毫も疑はなかつた。何となれば之を實現せしむるものは大能の神それ自身であるからである。ユダヤの國民は幾多の逆境に立ち、その國家は滅亡の悲境に陥つたけれども、この信仰ばかりは動搖しなかつたのである。而して基督の時代は正しくこの理想の實現を信じたのである。

バプテスマのヨハネは鷄群の一鶴といふよりも、灰鶴群中の丹頂といふべきである。彼は天國は近づきたり(馬太三の二)と叫んだのであるが、彼は天國に付いて何等説明を加へなかつた。天國の理想は獨り豫言者の所有でなく、民族一般の共有となつて居つた。その「近づきたり」といふことすら、必ずしも耳新しい言ではなかつた。多くの豫言者が叫びつゝあつたが、ヨハネはその偉大な

る人格を以て之を確めたに外ならなかつたのである。彼は多くの知られない豫言者の代表者であつたといつても差支ない。基督の前後に多くの書は著はされたのである。今日まで遺存するもの少くない。是等の著書にして神の國の顯現を語らざるものはない。又神の國の建設者メシヤの顯現を語るものが多かつた。バプテスマのヨハネが「我より後に來る者は我よりも力あり、我はその鞋を取るにも足らず」(馬太三の二)といつたことも、多くの豫言者が期待した所のメシヤである。エリコ府の盲人が耶蘇に向つてダビデの子といつたことも、時代思想の聲である(馬太二〇の三〇)。今少しくその時代の著書について之を論じて見やう。

シビル書は一人の著作でもなく、又一時代の著作でもない、基督前後に於ける豫言文集である。こゝにその豫言の二三を擧ぐれば

彼は萬民の上に永久の王國を建てん。(シビル書三の七六六―七六七) 不死の

王の大國は人類の中に顯れん。一の清き主權者來らん。彼は全地に於て世々權威を執らん。(同書三の四七一五〇)

善者の爲め泰平は地上に來らん(三の七八〇)

大神の豫言者は自から正義の王とならん(三の七八二)

エノク書も一人の著作ではない、基督前後の時代文集といふべきである。この書より二三の豫言を擧ぐれば、

智慧は撰れたる者に賦與せられん、彼等は生きて罪を犯さざらん。明にせられたる者には光來て悟れる者には悟來らん、彼等は終世罪を犯さず、従つて神の怒に觸れて死することなく、その壽命を全うせん。彼等の生活は平安を保ち、彼等が歡喜の年月は多くして長からん(エノク書五の八一九)

神は義人と平和を結ばん、而して撰ばれたる者を護り給はん。恩惠は彼等を司り、彼等は盡く神に従はん、彼等は神に悦ばれ、祝はれ、而して神の光は彼

等の上に輝かん(同書一の八)

メシヤの降臨に付ける豫言をあぐれば

神は日出の地より王を遣さん、彼は全地の戰を鎮めん、或る者は之を殺し或る者とは盟約を立てん、しかも之は自己の意志によつて爲さず、彼は大神の命に従つて之を爲さん。大神の神殿は金銀紫寶にて飾られ、地はその産物を生じ、海は好物にて充滿せん(シビル書三の六五二―六六〇)

神は天よりその王を遣はし、血と火と焰とを以て人々を審判せしめん、そこは一王族あつて、此審判を免れん。之は時代の動亂にも動されず、神殿を建る所の使命を有す。ベルシヤの諸王は眞鍮、黄金、鋼鐵等を獻納せん(同書三の二八六―二九二)。

神の定めたる日、顯はるべきダビデの子は不義の主權者を滅ぼし、異邦人よりエルサレム城を潔め、聖なる民衆を呼び集めん。全地は惡人に汚さるゝこと

なく、異邦人は征服せられ、彼等は地の極よりダビデの子の榮光を拜せんが爲めに來らん。彼は主の受膏者にして、兵力に頼まず、黄金に頼まず、偏に主に一任し、罪より遠ざかり、聖靈に由つて雄大とならん。彼は忠實に主の羊を保護し、而してその一も牧場より迷ひ去らしめざらん。その日に生存する者は福なるかな（ソロモンの詩の五の二一—四六）

我子受膏者はその多くの随伴者と共に顯はる、而して審判を免れたる民族に悦樂を與ふること四百年に及ばん。この四百年終ればメシヤも凡ての民族も死せん。（エズラ第四書七の二六—三三）

この審判の日まで至上者に守られたるメシヤは最後の主權者たる羅馬の上に審判を行はん、イスラエル民族の遣れる者に悦樂を與へん（同書十二の三一—三四）

彼はダビデの後裔より出て來り、元始より神に由り審判の爲め撰定せられた

る人なり（同書十二の三二）

是等種々の著書に啓示せるもの大同小異であるが、一として異邦人の審判とユダヤ人の幸福とを論ぜざるはない。之れを要するに神の國の建設を謳歌せざるはないのである。

十二使徒を始め、最初のクリスチャンは是等の時代思想に由つて養成せられたるものである。彼等が朝夕愛讀したる舊約聖書は是等思想の種子である。この種子は必ずその内容を満足せしむるまで發達するにあらざれば、止まざる生命力を有するのである。彼等十二使徒等は此思想の背景を有したのである。彼等は是等の大なる理想を懷いて、耶蘇をメシヤと信じたのである。然るにこの耶蘇はこの理想の萬分の一をも満足せしむること能はずして十字架上に死した。之は大なる破滅である。彼等の信仰はこの大難に遭遇しては、一刻も保つことは出来なかつた。この大破滅は到底免るべきものではなかつた。然るに之を免

れたるは果して何であらうか。彼等は耶蘇を棄つべき場合に置かれて、しかも何うして彼を棄てなかつたのであるか。之は耶蘇の偉大なる人格の威力である。彼等の腦裡に深く刻み付けられた印象は、之を取り去らんとしても取り去ることは出来なかつた。耶蘇が義人であることは彼等疑はんと欲して疑ひ得なかつたのである。耶蘇の復活を信ずることは、弟子等に取りては當然のことといはねばならぬ。復活に由らざれば、その心裡の秘密は解決せられなかつたのである。一たび彼の復活を信ずれば、暗黒の穴より出で、晴天白日を見るが如く、何も彼も釋然として明瞭となつた。彼等は肉體の基督と復活の基督とが同一人物なるを認むると同時に、この復活の基督にメシヤ事業の完成を要求するは、亦當然のことといはねばならぬ。耶蘇の復活はそのメシヤ事業の完成の爲めに外ならぬ。弟子等が祖先以來代々養成したる理想はこの復活の基督に由つて、始めて完成するを得ると彼等は信じたのである。彼等の要求は實に切迫して居

つた。彼等はこの復活の基督に「主よ、イスラエルに國を回復し給ふは此時なるか」と詰問した（使徒行傳一の六）。然るに基督は間もなく見えざる世界に昇天したのである。之は第二の失望となるべきものである。然るを此失望を免れたるは、取りも直さず基督の再來である。彼等は思ふた、イスラエル民族の罪が餘りに深く大なるが故に、メシヤは暫時顯現して天上を指して去つたのであると（使徒行傳三の二一）。故にこの昇天は彼等を失望せしめず、反つて彼等を奮激せしめたのである。彼等はキリスト再來を速かならしめんと欲して、金剛力を盡して奮闘したのである。基督の再來は初代クリスチャンの血と肉とであつた。何となればこの再來は神の國を地上に完成する唯一の希望なるが故であつた。

ユダヤ人とクリスチャンとの相違は重にナザレの耶蘇をメシヤと認むるや否やである。ユダヤ人はメシヤ來を翹望し、クリスチャンはメシヤ再來を翹望し

たのである。後者のメシヤは昇天して大能の右に在りと信ぜられ、エノク書によれば前者のメシヤも上天に在るのである。再來のメシヤとエノク書のメシヤとはその威嚴といひその權能といひ、其審判者たるといひその殺伐といひ、甚だ能く相似て居るのである。黙示録のメシヤは即ちそれである。黙示録のメシヤとエノク書のメシヤとを對照して見よう。

我れ身をかへして、我に語れる聲を観んとし、既に身をかへせば、金の七の燈臺、又その七の燈臺の間に人の子の如きものあるを見たり。其身には足まで垂る衣を着、胸には金の帶を束ね、首と髪とは白きこと羊の毛の如く雪の如く、目は火焰の如し。足は爐に燒くる眞鍮の如く、聲は大水の音の如し。右の手には七の星を持ち、兩刃の利劍その口よりいで、顔は甚しく輝く日の如し(黙示録一の二二—一六)。我れまた天の開くを観しに、一匹の白馬あり。之に乗る者忠信又誠實と稱へらる。彼は義を以て審判と戦争を爲せり。その目

は焰の如く、その首は多の冕をかむれり、……彼れ血に染みたる衣を纏へり。……天に在る諸軍白く輝ける白布を着、白馬に乗りて之に従へり。彼の口より利劍いづ、之を以て列國の民を撃ち、且鐵の杖を以て列國の民をつかさどらん。彼れ亦全能の神の甚しき怒の醜を踐む。彼が衣と股に錄せる名あり。曰く諸王の王、諸主の主。我れまた一人の天使の日の中に立てるを見たり。彼れ空中の飛鳥に大なる聲にて呼び曰ひたるは、爾曹神の大なる筵に集り來り、諸王の肉、諸軍の肉、勇士の肉、馬と之に乗る者の肉及び自主と奴隸、大と小との別なく、凡の人の肉を食へ、(黙示録一九の一—一八)之は人の子なり。彼は義を有し、義は彼と偕に住む。又彼は凡ての藏れたる寶を啓示す。靈の主は彼を撰び給へり、彼の運命は正義に由り、靈の主の前に於て永久に至るまで凡ての者に優れり。爾が見る所の人の子は諸王と諸權とをしてその居所より起たしめ、又諸の勇者をその地位より起たしめん、彼

は強者の手繩を解き、罪人の齒を打ち碎かん。彼は諸王をその位より落し、その領地より逐ひ給はん……彼は強者の顔を撃つて辱ぢ赤らしめん（エノク書四六の三一五）。

主は地上の諸王、諸權、諸位に命じて曰く、爾曹目を開き角を擧げて、神の選びたる者を知べし。主は彼を榮光の位に置き給ふ。正義の靈は彼の上に充ち溢れん。彼の口より出る言は罪人を殺し、凡ての不義者をその眼前にて撲滅せん（エノク書六二の一―二）。

黙示録の人の子はナザレの耶蘇に似ずして、エノク書の人の子と能く相似合ふて居る。のみならずパウロと雖も上天の耶蘇キリストを論ずるときは、正しくエノク書等に啓示せらるゝユダヤ人の基督觀を紹介し來るのである（テサロニケ後書一の七一―一〇同二の八）。

さてこの天上のキリストが地上に來るときは、それが第一の降臨であれ、第

二の降臨であれ、その目的は審判である。この思想はユダヤ教より傳承し來りたるに外ならぬ。審判とは地上の有權者、富豪及罪人を處刑して、義者に幸福を與ふることである。之はユダヤ人もクリスチャンも同様に考へて居つた。審判後の地上の状態は著者に由つて多少の相違はあれど、大體に於て同一である。地上は正義の行はるゝ所となる、食物充滿して、病氣なく、人々老せずして、壽命を全うするのである。黙示録は之を千年の泰平といふ。エズラ第四書は四百年といふのである。この泰平時代の事情は一種のバラダイスに外ならぬ。多くのクリスチャンはキリストの降臨はエルサレム城にあるべしと信じ、キリストの王政を待ち焦れて、如何なる逆境をも耐へ忍んだのである。

パウロの如きはキリストの再來を斯の如く肉的には考へなかつたのである。彼は在世中に基督再來すべしと信じて居つた。此時彼は死を免れて變化するといつ居る（コリント前書一五の五二）。此變化の體は即ち復活の體であつて、

肉體とは大にその状態を異にして居る。復活前の體は朽つべきものである、復活後の體は朽つべからざるものである。前者は賤くして地に付くもの、後者は尊くして天に付くものである。彼は血肉は神の國を嗣ぐこと能はずと斷言して居る（コリント前書一五の五〇）。パウロはキリストの再來と義人の復活とは同時にあるべきものと信じて居る。復活の體と基督の體とは同一の性質を有するものとして居る（ピリピ書三の二〇―二一）。基督が大能の右に在るを吾等が見ること能はざるは距離の遠きが爲めにあらず、吾等の肉眼にて見ること能はざるが爲めである。さらば復活の體はこの地上の状態に適すべきものではない。パウロは復活の兄弟と偕に雲に携へられ、空中に於て主に遇ふべしといつて居る（テサロニケ前書四の一六―一七）。この思想は千年泰平論とは大にその意味を異にして居る。パウロの來世觀は千年泰平後に來るべき状態と殆んど同一である。ユダヤ思想は一躍してパウロの思想に達すること能はず、先づ千年泰平

の思想を通過して、而して後パウロの思想に到達し得たと見る方がよからう。之を要するに再來のキリストが肉のキリストならざるは明白である。既に再來のキリストが肉のキリストにあらず、復活して又は變化して彼に遇ふ所の者も肉の人にあらざる以上、彼等は最早この世の人々ではない。さらばキリストの再來とはこの世界の壊滅を意味するのであらう。果してペテロ後書にある如く、壊滅ならんには（ペテロ後書三の一〇―一一）、彼が我に來るといふよりも、寧ろ我が彼に行くといふが至當であらう。この世界は最早住むべき所ではない、既にその存在をすら失ふが故に、キリストを受け入るべき所ではない。吾等は此の壊滅すべき世界を去つて永遠の世界に移轉するを要す。假令この世界が變化するとしても、固より同一の世界ではないのである。基督再來説によれば、彼が此世界に來ることは、結局意味のないこととなる。

再來失望の危機

ペテロ、パウロ等が熱望した如く、キリストは再來しなかつた。この世界は彼等が想像したやうに壊滅しなかつた。日月星辰は従前の如く大空に輝き、山嶽は依然として前日の如く聳え、人類界は過去を繼承してその歴史を造りつゝある。初代のクリスチンは確に失望した、殆んど信仰の破滅に遭ふたのである。吾々は之を想見して戦慄せざるを得ない。耶蘇の死が弟子の爲めには大打撃であつたが、此打撃に劣らない打撃は實にキリスト再來の失望であつた。彼等耶蘇の弟子は耶蘇の復活に由つて、自からも精神的に復活したのであるが、キリストの再來が空望となつたとき、彼等は如何にしてその破滅を免れたのであらうか。彼等は信仰に由つて内的充實を實驗して居つた、義と和と聖靈に由れる悦樂とは彼等の胸底に充實して居つたのである、此尊き經驗は彼等の爲めには何物にも交換し難い寶であつた。假令キリスト再來せずとも、この經驗の有難さは忘れられないのであつた。若し夫れ胸に一物なく、キリストの再來を待つ

て居つたならば、失望と偕に破滅でなければならなかつた。然るに之れを免れたるは正しく胸底に靈的實驗に富んで居つたからである。約翰傳の著者の如きクリスチャンは内的にキリストの實在を認め、その胸底に於て靈的キリストとの交りを辱うしたのである。彼等は空しく天を仰ぎ、又は將來を翹望してキリストを求めず、その内的實驗に由つてキリストに見えたのである。之れは大なる靈的獲物であつた。こゝにキリスト再來の眞義が存するのである。従つてこの實驗が高調せらるゝに従ひ、キリストの再來を熱望しないやうになつた。のみならず基督教會は時代を経るに従ひ基督教の實現となつてきた。神の國は教會の中に顯はれ始めたのである。こゝには奴隸もなければ自主もない、富豪もなければ貧者もない、男女同居して毫も醜くきことを演ぜず、新人に由つて造らるゝ新しき社會は彼等に大なる満足を與へ始めた。彼等はこの教會の生活を享樂して満足したのである。キリストの再來は何時とはなしに教會の中心眞義

と見られずして、次第に外部に追ひ出されたのである。キリスト再來論は遂に異端となり邪説となつた。黙示録の如きは偽書である、聖書に加ふべきものにあらずと論斷する教師も起つたのである。

基督自身の再來觀

キリストの再來に付いて基督彼れ自身は如何に考へて居られたか。之は弟子等の思想のやうに簡單明了に解決することは出来ない。耶蘇のメシヤたる自覺は時代の思想とは大なる相違があつた。荒野の誘惑は乃ち時代のメシヤ觀であつたが、耶蘇は一々之を排斥された。耶蘇がメシヤであるといふは、時代の受け入れ得る所ではない。故に耶蘇はペテロに對し、血肉汝に示せるにあらず、天に在す我父なりといはれた。然るに再來の基督觀はナザレの耶蘇とは全く別人物である。その道義的性格は西と東との相違である。一は耶蘇彼れ自身のキリストであり、一は時代思想のキリストである。ナザレの耶蘇が死後忽ち再來

の基督となることは、心理上不可能と思はるゝ程の相違である。試に黙示録のキリストと馬可傳のキリストとを比較すると直に分るのである。故に再來のキリスト觀は耶蘇の思想にあらずして、弟子等が有したる時代思想ではなからうか。此と彼とは相違するのみならず、矛盾して居るではないか。例へば、甲、ヤコブとヨハネ耶蘇に來りて曰けるは、師よ我等が求むる所を願くは我等になし給へ、……爾榮を得んとき、我等の一人を其右一人をその左に坐せしめよ。耶蘇彼等に曰けるは、爾等は願ふ所を知らず、……吾が右左に坐する事は我が予ふべきにあらず、たゞ備へられたる者は與へらるべし（馬可一〇の三五―四五）。

乙、爾曹は世あらたまり、人の子榮光の位に坐する時爾曹も十二の位に坐して、イスラエルの十二の支派をさばくべし（馬太一九の二七―二九）。

丙、人の子おのれの榮光をもて諸の聖徒を率ひ來る時はその榮光の位に坐し、

萬國の民をその前に集め、羊を牧ふ者の綿羊と山羊とを別つが如く彼等を別ち、綿羊をその右に山羊をその左に置くべし……(馬太二五の三一—四六)。
 丁、ペテロ耶蘇に來りて曰けるは、主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯すを赦すべきか七次までか、耶蘇彼に曰けるは、爾に七次とはいはじ、七次を七十倍せよ(馬太一八の二一—二二)

是等を對照して觀るに(甲と丁)は耶蘇の肺腑より發したるものであるが、(乙と丙)は時代文學に多く散見する所である、否時代文學の眞髓である。

ナザレの耶蘇は死後此の如く豹變すべしと、自から思惟したのであらうか。之は頗る疑はしきことである。果して然らば、耶蘇は十字架の死を豫想して頗る狂的になられたといふ者あるが、之は容易に否定すべからざる事と思ふ。之に反して再來のキリストは耶蘇彼れ自身の思想にあらずして、弟子の時代思想を彼の口に附加したのであると論斷するもの決して少くはない。耶蘇はその

前途に暗雲の横はるを認めたと同時に、この暗雲の彼方に神の國の輝けるをも透視したのである、彼はその慘憺たる死を豫言し、又その復活を豫想するに際し、我れ誠に爾曹に告げん、此處に立つ者のうちに、神の國の權威をもて來るを見るまでは死なざる者あり(馬可九の一)、又エルサレム滅亡を豫言するに際し、其時人々は人の子の大なる權威と榮光を以て雲の中に顯れ來るを見るべし(馬可一三の二六)、又大祭司の法庭に於て死罪の宣告を受くるに際し、人の子大權の右に坐し、天の雲の中に顯はれ來るを見るべしと(馬可一四の六二)いはれた。之は當時の言葉を採用して、神の國の勝利を斷言されたのではなからうか。一體人の子雲に乗り云々といふ辭句はダニエル書七の十三より轉化したるものなるは明確である。この人の子といふはキリスト彼れ自身をいふのではない、神の國をいふのである。故に人の子が雲の中に現れ來る云々は基督再來の意味にあらずして、神の國の勝利をいひ現はしたるものなることは間違ない。

いのである。故に人の子雲に乗る云々を以て直にメシヤ彼れ自身であると思ふは早計である。

又基督の復活は乃ち基督の再來であるといふものもある。基督十字架に死したるは、現世との別離ではないか。既に弟子等に別を告げて去つたる基督が、復活して復々弟子等に面會したるは、正しく彼の再來を意味するのではなからうか。之を否定することも少々難事ではないか。ナザレの耶蘇が暗黒より透視してその復活を豫想し、而して永久の勝利者たるを確言されたるは、偶以て弟子等がその天よりの再來を論證する手懸となしたものではなからうか。キリスト再來の觀想には殺すべからざる生命が含まれて居る。この生命は耶蘇の靈であるが、さてこの生命の勝利と旺盛とを形容するには時代の觀想を衣として居るのである。之は已むを得ないことではないか。

初代のクリスチャンはキリストの再來に熱中して、復々大なる失望をなした

のであるが、しかし彼等は漸く時代思想の衣を脱し去つて、生命そのものを獲得したのである。ヨハネ傳の如きは即ちキリスト再來の根本義を明にして、人をして靈眼を開き、靈のキリストを觀ぜしめたのである。初代のクリスチャンはキリストの再來を希望したると同時に、その不必要を認むる一面をも發揮しつゝあつた。我が名の爲に二三人の集れる處には我もその中にあればなり（馬太十八の二〇）、又我は世の終まで常に爾曹と偕に在るなり（馬太二八の二〇）との如きは、キリストの現在を認むるものにて、別にキリストの再來を希望する必要はなからう。パウロの如きはキリスト我に在りて生けるなり（加拉太書二の二〇）といつて居る。このキリスト内在の一面を啓發し來るときは、天より雲に乗り來るキリストを熱望せざるやうになるであらう。基督自身は神の國の内在を説き給ふた、神の國は顯はれて來るものにあらず、此處に視よ、彼處に視よと人のいふべきものにもあらず、それ神の國は爾曹の衷に在り（路加一

七の二〇—二一と、この神の國は畑中の種子の如く次第々に發育するものであるとは、彼の二三の種子の比喩の示す所である。史上には革命もあれば興廢もあり、リバイバルもあれば、衰頹もある。神の審判として畏るべき事實は一にして足らない。是等を通じて神の國は發展しつつある。彼の天地壞滅、人類界の焦熱地獄を豫想し、キリストの再來然かも肉眼にて見ゆるキリストの再來を熱望するが如きは、千年を一日視する神を信ぜざる厭世的な、悲觀的な、絶望的な、世界と人類との發達を無視する、亡國的根性を有する非基督的狂熱の叫びである。耶蘇の精神とは天地も管ならぬ異信仰である。ナザレの耶蘇を偽キリストと判定したユダヤ人の空想に捕へられたる迷信である。正信者は確實なる靈的實驗を積み重ねるを要す。若し夫れ胸中何等の經驗なく空虚となるときは、驚くべき妄信は襲ひ來り、猥りに外界に於けるキリストの再來に熱中して、救ふべからざる、笑ふべく、悲むべく、憐むべき失望の苦境に陥るのである。

る。キリスト再來說はユダヤ教よりの輸入物にして、クリスタチャンは宜しくキリストの心を以て之を排斥し去るべきである。

終
末
論

世界終末の思想は基督教に由つて始めて世界に紹介せられたるにあらず、基督教以前より多くの民族の間に行はれたものである。基督教の生れた所のユダヤ民族は古へより輝ける理想を懐いて、千辛萬苦を嘗めたのである。イスラエル民族は狭小なる土地を有したれども、又四方の國々より壓迫を受けて悲境に陥りたれども、神は是等の國々を審判して、最後にイスラエル民族を偉大ならしめ、その土地を擴大ならしめて、生活上萬福を完うするやうにならしめ給ふとは、多くの豫言者がその民族に教示したる所である。イスラエル民族は個人々々の終末にその信念を凝らすことなく、専ら民族の輝ける終末に着目して、凡ての希望をこの一點に集中したのである。此終末時代には固より神の親政が行はるゝをいふのであるが、ダビデ王統の主君が神の皇太子として政權を掌握

するものと想像して居つた。(イザヤ書二の一—一〇、エレミヤ書二三の五—八、イザヤ書二の二—四、エゼキエル書三四の二〇—二四)。然るに此理想は一旦滅茶々に打ちこはされて、民族の終末は隆盛とならずして却て破滅となつた。然れども民族は之れが爲めに絶望に陥ることなく、更に輝ける希望を贏ち得て復活し來つたのである(エゼキエル書三七の一—一四)。彼等は千辛萬苦を嘗め、あらゆる妨碍を排して、新しき一小國を祖先墳墓の土地に建設するを得たのであるが、代るく大國に虐待せられ、辛うじてその存在を維持し得たのである。分けてもスリヤの虐政に苦められ、その神聖なる民族の信仰を蹂躪せられんとしたるを以て、その義憤は遂に民族の勃興となり、面の當りイスラエル民族はその輝ける終末時代を豫想するに至つた。ダニエル書の豫言はこの理想的終末時代を人の子の如きものが白雲に乗じて天より降り來ると形容した(ダニエル書七の一—一四)。この豫言は國民勃興の英氣とその國民性の善良とを教

示するものであつて、爾來この豫言はイスラエル民族の指導者をインスパイヤしたのである。之に次ぎて最も感化を及ぼしたる終末論はエノク書であつた。(この書は紀元前百年前後に編纂せらる)。基督の時代は様々なる終末論の流行した時であつて、その時代が取りも直さず終末時代と認められて居つた。メシヤは終末時代に出現すべき君主であつて、彼は異邦人を審判して、イスラエル民族の爲めに一大王國を造り、古への豫言者の豫言を實現するものと期待せられたのである。基督教はこの終末思潮の澎湃たる真中に呱呱の聲を揚げたのである。基督教が終末思想を有することは毫も怪しむべきことではない。

基督時代の終末思想には自然的なると超自然的なると、又この二者が混同したるとがあつた。自然的といふは、その豫言者が豫言した如く、イスラエル民族が大に勃興して、羅馬人を排斥し、而して後幸福なる社會の建設せらるゝことである。超自然といふは現實の世界が一旦打ち壊はされて、新天新地の顯は

れ來ることである。又そは孰れにしても義人が復活し來るやら、異邦人が審判さるゝやら、兎に角正義の新社會が顯はれ來るといふが、乃ち二者の混同したものである。この正義の時代をメシヤ時代といふ。基督の時代はこの希望を有して居つたのみならず、それが目前に切迫して居ると觀じた時代である。神の國は近けりと叫びたるは、獨りバプテスマのヨハネのみではなかつた。ナザレの耶蘇は時代の寵兒であつて、自から此神の國を齎し來るメシヤなりと自覺したることなれば、終末の遠きにあらざることは、自から信じて疑はざりし所であつた。彼の所謂神の國は如何なる性質を有するものであつたらうか。ユダヤ人の多數にて代表せられて居つたダビデの王政でなかつたことは明白である。耶蘇の心頭を襲ひたる荒野の誘惑は即ち此王政であつたことは疑を入れぬ。(路加四の五―八、馬太四の七―一二)彼が政治團體を造らずして、偏に民族の教化に力を込めたることはその實證である。さらば彼は専ら超自然的の力に由れる

世界の廢滅と社會の壞亂とを期待したのであるかといふと、斷じてさうではない。彼は此自然界に神の國が來ると信じ、社會の罪惡と戦ひ、人心の改善に全力をそゝいたのである。彼は道義的識見が餘りに高かつた故に、ユダヤ人の多數が期待したるやうに、一大戰亂又は壞亂にて終末時代が贏ち得られやうとは思はなかつた。又彼は餘りに社會的同情が深かつた爲めに、神祕の境涯に終末時代を享樂することを企圖しなかつた、又彼は餘りに現實的感想が多かつた爲めに、超自然の奇跡に依り頼まなかつた。彼は終末が近きにありとは見たなれども、その年その月その日その時は人の知るべき所にあらずといつて(馬可一三の三二、使徒一の七)、唯人々の警醒すべきことを激勵したのである。彼は自己の終末が切迫し來るを見て、超自然的色彩を増し加へた徵候なきにあらずと雖も、彼はその終末を以て社會の壞亂とは見なかつたのである。彼は自己の復活を語つた(馬可九の三一)けれども、之と同時に義人の復活あるべしとは期

待しなかつた、又彼の復活はバツサイ派の主張したるが如き肉體の復活でなかつたことは、彼とサドカイ派の人々との問答にて知ることが出来る（馬可一二の一八一―二七）。彼は復活してそのメシヤ事業を繼續すべしと堅く信じて居つたのである（馬可一四の二五、馬太一九の二八）。

耶蘇をメシヤと信じたガリラヤ人は、耶蘇の死後その眼を上天に注いで、耶蘇の再來を期待したのである。けれども彼等はその全力を民族の教化に集中し、又推して異邦人の教化に及ぼしたのである。彼等は終末がメシヤの再來と偕に始まるものと信じて居つた。而してメシヤの再來が遠きにあらずと信じてをるが故に、その所謂終末時代も門前に切迫し居ると思つた、其布教に熱中したることは如何ばかりであつたか分らぬ。是等終末思想は新約聖書に充ち満ちて居る（テサロニケ前二の三、四の一三―一五の一一。コリント前一五の二〇―二八、五〇―五八、コリント後四の一六―一五の一〇ガラタ書六の八、羅馬書五の五、八

の一七―二五。コロサイ書一の四以下、三の一―四。ピリピ書一の二一。テモテ後書四の六―八。ペテロ前書一の三―九。ヨハネ一二の五、二五、三の一―三、五の一―一三。ヘブライ書六の一八一―二〇、一〇の三七―三九、一二の一―一一。一三の一四、黙示録二の一〇）。獨り黙示録に限つたことではない。是等は如何なる形狀を以て進化し發展し來りたるか、極めて興味ある史的事實である。概略に之を述べて見よう。

ユダヤ民族の期待したる政治的終末思想は、耶蘇の終末思想とは雲泥の相違あつたけれども、そのまゝ基督教に混入し來つて、初代基督教の一大信條として遵奉せられたのである。それは耶蘇が再來して、エルサレム城にその榮光の王位を据え、世界を統治すべしと信じたことである。エルサレム滅亡の後にはメシヤ再臨の場所がエルサレムより小亞細亞のペプザ府に移轉したのである。この終末思想によれば、その時代には天變もなく地變もなくして、野も山も人の

食物を供すべきもの夥しく、人命も長くして千年に達すべく、クリスチャンが社會の中心となつて、世界の王者たる地位を保つといふのである。此時代には多くの義人は復活し來つて、基督と共に世界を支配し、正義の王國は千年の間に地上に存在するといふのである。之は超自然界ではない、古の豫言者が豫言したる理想の王國である。この王國と羅馬帝國とは固より兩立すべきものではない。一は神の國にして一は惡魔の國である。故にモンタニスト派の如きは遠慮なく帝國の滅亡を預言した、従つて極刑に處せられたものも決して少くなかつた。この終末思想は人類の一大幻夢となつて顯はれ、多くの人々が之れに心酔して、その身命を投げ打つて活動した迷信といはゞいへ、その感化は實に偉大なるものであつた。人類界には何の時代にも何の地方にも大なる活動飛躍がある。その動機には必ず此の如き幻夢が含まれてをるものである。此の如き千年泰平の期待は人類社會の生を意味するものにて、斷じて死を意味するもので

はない。故に我々は初代基督教の飛躍に對し、甚大の同情を拂はざるを得ない。又その幻夢は何の意味もなく、内容もなく唯幻夢として水泡に歸すべきものであるかといふと、斷じてしからず、基督教の主張は個人々々を來世に濟度するのみを目的とするものに非ずして、地上に神の國を建設するにあるのである。その千年泰平の期待の如きは少年時代の幻夢として、笑ふべきにあらずして、寧ろ頼母敷く稱揚すべきことである。この現實的眞理は基督教の特有にして、ユダヤ民族より傳承し來り、而して今や人類の理想となりつゝあるのである。唯羅馬帝國に由つて代表せらるゝ地上の國々を惡魔の管轄地と思惟したユダヤ思想が大なる誤謬である。又基督の再來を靈的に觀ずして、肉的に觀たことが大なる謬見である。のみならず餘りに基督再來の迅速ならんことに熱中して、人類の自然的發達を無視したるは——その熱誠は去ることながら——一大謬見といはねばならぬ。

此の千年泰平の期待は基督教全般の思潮ではなかつた、寧ろ傍系的潮流に外ならなかつた。基督教全般の潮流は徐々として羅馬帝國を教化し、帝國の中に靈的帝國を建設するの方針を取りつゝあつた。この方針は正しくその目的を達し、皇帝コンスタンチンは基督教の歸依者となり、基督の前にその冠冕を脱し、恭順の態度を示したのである。この大なる出來事に由つて、千年泰平の終末思想は大なる打撃を受け、多くの人々は帝國そのものに神の國を見出し、こゝに終末時代の實現を見得るものと考へたのである。けれどもこの帝國の根底は餘りに腐敗して居つたので、到底基督教の理想に適合することは出來なかつた。多くの義人がこの基督教國に懺焉として修道院に遁れ去つたことは、また無理ならぬことである。羅馬帝國の改心に於て終末時代を見んと欲したるは、實に一時の夢想であつた。心ある者はこの帝國の中に勃興しつゝある基督教會が、終末時代を造營しつゝあるのではなからうかと、心付き始めたのである。帝國

は北狄蠻人の爲めに破壊せられ蹂躪せられ、眞に悲慘の狀態に陥つて了つた。世界の終末は暗黒たるべきかは、多くの人々が悲觀した所である。然るにオーガスチンの如きは、當時の基督教思想を代表して、終末時代は悲むべき羅馬の滅亡によつて始まり、基督教會に於てその旺盛を極むべきことを預言したのである。彼はその「神京」といふ大著に於て羅馬帝國の滅亡せねばならぬ理由を論じ、基督教會が之に代つて旺盛を極むべき道理を示した。由來羅馬教會はこの預言の中心點となり、基督教の神の國はこゝに實現し來るものと信じたのである。

羅馬教會は一方に於ては羅馬帝國の後繼者にして、そが偉大なる組織を形作り、軍隊を使用せずして、廣く歐洲諸民族を統治した手際は、實に人意を安んぜしめたのである。當時の人は羅馬教會より以上の世界は地上に顯現し來らうとは思はなかつた、此教會より更に以上の教會といへば、そは天上の教會であ

る。地上の教會は戰鬪の教會であつて、天上の教會は凱旋のそれである。故に地上の教會と天上の教會との榮光は固より日を同うして語るべきではないが、此地上の教會を通過しないでは、天上の教會に入ることは出来ない。故に神の審判は地上を去て他界に移る時に行はるのであつて、従つて別に地上に於ける終末時代の審判を豫期しないやうになつた。彼の煉獄といふが如きは、地上に於て未だ十分に清められなかつた靈魂が正しく通過すべき所の道程であつて、畢竟するに榮光の天上に昇る道に外ならぬ。此煉獄説は後日様々の迷信を生ずる媒介ともなつたので、プロテスタント教は之を破棄したのであるが、實は深い道理の存するものにて、靈魂の生活状態に自から階級あるを示すものである。しかししてその階級は先天的に定められたるものにあらずして、各自の靈魂が上進し行く道程にて、そこに自からの順序を示すものなれば、道理のこもりたるものといはねばならぬ。此の如くして天主教會は人々の心頭より所謂終末時

代の觀念を取り去つたといつてもよい。去りながら羅馬教會もその腐敗は免れなかつた。人心は何とはなしに此教會に満足しないやうになつて來た。法皇殿内の醜聞は敬虔なる人の心を憤慨せしめた。修道院に入りたる者は、そこに神祕の祝福を享けたものではあるが、この修道院生活と法皇殿生活との懸隔が愈々遠くなつて、殆んど聖俗の區別を付けねばならぬやうになつた。のみならず、遂にはこの修道院そのものが腐敗し始めたのであるから、人心は他にその憧憬の世界を見出さねばならぬやうに餘儀なくせられた。

プロテスタント教は羅馬教を以て迷へる教會となし、黙示録の血に染める婦と見たのである。新教は別に神の聖旨に適ふ教會を造らねばならぬ。新教の信徒の中にはその時代を終末時代と見たものもある。而して羅馬教會は神の恐ろしき審判を受くべきものと考へた。彼等は又その教會が甚だ理想的ならざるを觀て、目に見ゆる教會と、目に見えざる教會との區別を設けたのである。目に

見えざる教會とは羅馬教會の尊重する天上の教會ではない、目に見ゆる教會の中に存する眞實の教會にして、神にのみ知らるゝものである。然れども彼等は此の如き考へを以て満足せず、その目に見えざる教會を目に見ゆる教會となさんと欲し、大なる奮闘をなしたのである。彼の獨逸教會の如き、又國教會の如き、國民を擧げて理想的教會たらしめんと努力した。カルヴキンの如きはゼネヴ全市を擧げて神の教會たらしめんと欲した。而して國家と結付いては到底腐敗を免れざるが爲め、國立教會より分離して獨立教會を造りたる英獨人もあつたが、之は則ち英の自由教會であつて、廣く米國に蔓延したのである。是等の自由教會の勃興したる當時が則ち終末時代であらうと思つたものもある。多くの人々は此の如く大理想に向つて奮闘したのであるが、此理想は容易に實現し來らない、常識を以て考ふれば、架空の樓閣のやうに觀えたれども、クリスチャンの心頭より決して飛び去らない。現代となつては基督時代に復古して、愈々

切實に神の國の顯現を目撃せんと熱中するやうになつた。此神の國と教會とを同一視することなく、教會は神の國を準備するものと思ふるやうになつた。此期待は古代のそれに比すれば、愈々その根據を深うするやうになつた。哲人カントは道義的王國の存在を發見し、此王國によつて始めて道義の法則が行はるべきことを論じた。此王國は神の子の國である。此の國は深遠なるものにて、神の子に由つて組織さるゝものである。之は古來クリスチャンの期待したる王國を哲學的に論究したるものといはねばならぬ。基督の所謂天國はカントの道義國に由つて更に能く説き明かさるゝやうになつた。此の如き内觀の王國は獨り神祕の境涯として終るべきものでなく、必ず人類社會に實現し來るべきものである。唯その實現し來る道は漸を追うて來るべきものにて、遽に天上より來臨すべきものではない。この王國の實現にもその實現の理法があるのである。奇跡的にあらず、合理的でなければならぬ。初代のクリスチャンは重に之を奇

跡的に降臨すると見たのであるが、基督の説明は如何にも自然的である。彼は之を種子の生長に比す。この點は近世の思想と甚だよく似通うて居る。ヨハネ傳は此國王の實現を以て宇宙に充ち滿つるロゴスの史的顯現と観たのであつて、近世思想の魁といつてよい。ヘゲルの理想的國家も之れ以上ではない。この思想は隱微の中に傳播して、クリスチャンの深い思想となり、カントの如き哲人を待つて更に遠大なるものとなつたのである。是に於て基督教の元始より種々の形狀を取つて、人心を刺激し獎勵し聖化した終末思想が、時代を追うてその物質的外衣を脱ぎ去り、その眞體を示して來つたのである。この眞體が顯はれて來る丈それ丈、その幼稚なる終末思想を去つて、道理の國を實現すと觀じ來つたのである。故に幼稚なる終末時代なるものは自からクリスチャンの心頭より取り去られて、神の國の自然的實現を期待するやうになつた。偶終末時代を主張する教派も現はれざるにあらねども、基督教は大體に於てこの幼稚なる思想を放棄したのである。

想を放棄したのである。

終末思想と死者の復活とは古來堅く結付けられて考へられたのである。故に若し終末時代の期待が漸く薄らぐに従つて、自然死者の復活思想が變遷せねばならぬのである。元來死者の復活思想はユダヤ教より傳承し來れるものにて、更にその源に溯るときは、恐らくペルシャ思想に負ふことゝ斷定せらるゝのである。その時代の世界觀は天上、地上、地下の三界に區分してあつた。天上は神や天使の世界にして、地上は人類の世界、しかして地下は死者の居る所である。この地下界は極めて朦朧たる、恰も地上界の影法師のやうに想像されて居つた。ところが時代を追うて漸く明白となり、地獄極樂の存在する所であるかの如く考へられたのである。然れどもユダヤ人は地上の生活を以て遙に地下の生活に勝るものと考へた故に、地下の死者が終末時代に於ては地下より復活し來り、各々肉體を備へて復々地上の生活を始むるものと期待した。最初には義

人ばかり復活すると考へたのであるが、後日は悪人も亦復活し來つて、相當の刑罰を受くるものと考へたのである（ダニエル書一二の二）。この終末時代の復活思想が基督教會の中に侵入し來つて、終末時代の信仰と同じく基督教會の信仰と考へられたのである。然れどもクリスチャンは基督と偕に居ることを無上の幸福と自覺したるのみならず、又正さしく基督と偕に居ると信じて居つたのである。この信仰と實驗は深くなり確となればなる丈け、死後益々基督と親密になること、信じたのである。さらば死者は基督の在らざる地下に行くことよりも、基督の在す上天に昇ることを願はざるを得なかつた。こゝにクリスチャンの苦痛があつたに相違ない。傳承的信條によれば死後地下に行くのが至當のことである。けれどもクリスチャンの新なる熱望によれば、上天に昇らざれば、幸福は得られない。地下も暫時ならば忍耐も出來やうけれども、長い／＼間この地下に居つて、基督から離れて居ることは、苦痛に堪へざる所であるのみな

らず、如何にも不合理のやうに思はる。パウロの如きは地下に行く意志がなかつた、願くは生きながら靈化して基督に逢ひたいと思つた（コリント前一五の五—五五、コリント後五の一—四、ピリピ書三の二〇—二一。テサロニケ前四の一六—一八、ピリピ書一の二—二四）。約翰傳によれば基督とその弟子との離別は實に暫時である（約翰一六の一七—二二）。天父の許に往く基督は間もなく復來つて弟子共を受け入れるとある（約翰一四の一—四）、しかして彼等も基督の在る所に行けると示してある。弟子等が地下に往くべきことは毫も見えて居らぬ。さらばクリスチャンに取りては死は即ち昇天の門でなければならぬ。是れクリスチャンの宗教的意識より割出される所のものである。こゝに於て肉體の復活は無用の事柄なるのみならず、眞に靈的生活の邪魔と見るより外はない。天上の靈が態々地上に下つて肉體の復活を實驗せねばならぬとは、眞に餘計なる仕事といはねばならぬ。終末時代の思想が漸く消滅すると偕に肉體

の復活も従つて消滅するは亦免れない所であらう。

こゝは復活を論ずる所ではなく、靈魂不朽を説く所でもないが、終末思想に關聯する丈を論ずるのである。義人の復活は終末時代以前にあつて、義者不義者の凡てが復活するは、終末時代の最後にあるべく信ぜられて居つたのである。それでも終末時代そのものがその眞味ばかりを残存して、その形骸を基督教の發展と偕に脱却したので、この時代に附加する思想も亦消滅せざるを得ない。一體終末時代に期待した祝福はクリスチャンの内觀に於て實驗するやうになつたれば、たとへ終末時代が來らずとも、別に失望するに及ばないやうになつた。又この終末思想の内容は基督教の發展と偕に發展し來り、結局道義界があらゆる社會に實現し來ることに由つて、その理想は成就さるゝのである。その如く復活の内容がクリスチャン各自の靈的實驗に意識せらるゝやうになり、肉體を有するうちに早く既に靈的復活の事實を實驗し（羅馬六の二―五、コロサ

イ書三の一―四)、最早我れ生けるにあらず、基督我が裏にあつて生けるなりといふに至つては（ガラタ書二の一九―二二）、死の權を壓して昇天せんこと疑ひない。若し夫れ強ひて復活の言葉を保存せんとすれば、そは此處に死して彼處に生き、この弱き賤き生活を去つて彼の強き尊き生活に移ることをいふのである、けれども復活の信仰はギリシヤの靈魂不朽の信仰に比すれば、寧ろ合理的と思はるゝことが少くない。靈魂不朽論は多元論にして各個の靈魂が先天的に不朽なるが故に、若しその惡性質の變化せざる以上はその苦刑は永久に繼續せねばならぬ。さらば世界の終局は善惡二界の存在を肯定するものにて、之を以て最終の審判といふのである、即ち一方に惡世界あり一方に善世界あるといふ譯になる。復活の信仰はしからず、復活は靈魂そのもの、固有的靈能によるものにあらずして、神の意志によるのである。復活は一大進化を意味する。神が復活を要求し給はないならば、復活はないのである。靈魂不朽の如く復活は必

然の理に基くものではない。故に神の目的に適するものは復活し、適せざるものは復活しない。神の意志は本来善意志である。善意志であるが故に、善人の復活は然るべきことなれども、悪人が復活して永遠の苦痛に入ることは、極めて不合理である。聖書の中には悪人の復活を書いてあるけれども、之はユダヤ思想であつて、基督教の中心眞理より割出されたものとは思はれぬ。正義の宿る新天新地が即ち世界最終の目的たるべければ、義人のみ生存して不義者が消滅すると見るが正當のことであらう。之れが基督教の中心眞理に適合する所の思想と思はるのである。

この最終の新天地に適合する者は誰れであらうか。基督は明確に之を斷言した、即ち「我が天に在す父の聖旨に従ふ者のみなり」と斷言した（馬太七の二一）。昔時からこの新天地に住すべき者は獨りクリスチャンであるかのやうに思つたのであるが、基督の言によれば、所謂クリスチャンなる者が盡く天國に入

るといふ譯ではない、唯神の聖旨に従ふ者のみ之れに入るとあれば、そこには狭き意味もあり、又廣き意味もある。狭き意味によれば、クリスチャンといふても、眞に神の子となつて居らぬものもある、形式のみのクリスチャンであつて、眞實はクリスチャンならざる者もある。此の眞實ならざるものは、天國に入ることが得ないのである。さらば眞實のクリスチャンとは基督の心を有する神の子をいふのである。廣い意味にて基督の意味を解すれば、クリスチャンの外に神の聖旨に適ふ者なしとはいへない、寧ろ多くあるといふ方がよいのである。馬太傳第二十五章（三一―四六）の世界審判の有様を見れば、基督の名を知らずとも、基督の心を有するものは天國に入ることが得ると知らる。約翰傳によれば宇宙の生命であるロゴスは人類開闢の時代より人の光である。さらばロゴスの光を歡喜しつゝあつた所の人々は、基督の信徒である。初代のクリスチャンがソクラテスやヘラクリタスを基督以前のクリスチャンであるといつたことは、基督教

の真理を言ひあてたるものといはねばならぬ。さらば天父の聖旨に従ふ者が幾人も基督教外にあるを認めてあるといつてよからう。殊に舊約時代のイスラエル人並に祖父時代の人々にして天國に入るべきものゝ多いことは、基督も之を斷言して居るのである。舊約聖書そのものが決して偏頗な立脚地に立つて編纂されたものとは思はれない。敬虔なるヨブの如きはイスラエル人にあらずして、異邦人ではなからうか。又メルキセデクの如き祭司も異邦人ではなからうか。此に由て觀ると天國に入る者は必ずしもクリスチャンに限つたものではない。人の衷心に賦與せられた靈能が人格となつて發生し來り、幸に自滅の道を取ることなくして、神の恩恵に生長するときは、更に向上して上天の生活に入るは、聖書の保證する所である。たとへその種子が芥子の如く小なりとも、幸にその生長發育の道を得るときは、地上にては如何に幼稚なるとも、天國に於てその發生を遂げ得ること亦聖書の保證する所である。終末思想がこの内的生命に發

はれて發展し、多くの人類を魅したるは、猶有力なる天稟の少年がその内的生命の活躍に刺激せられ、紫雲の希望を畫いて、之を獲得せんと奮闘するやうなものであつて、吾々は寧ろその壯なるを見て驚歎すべきではなからうか。吾はパウロの言を以てこの論文を結ばうと思ふ、曰く彼れ（基督）諸の政及び諸の權威と能を滅して、國を父の神にわたさん是れ終なり。……最後に滅さるゝ敵は死なり、……萬物彼（神）に従ふときは、子（基督）も亦自から萬物を己に服はしゝ者に従ふべし、是れ神萬物の上に主たらん爲めなり（哥林多前書一五の二四―二八）。基督は征夷大將軍である。その使命は死を滅ぼし、その權を奪ひ去ることである。基督この使命を終ふるときを世界の終末とはいふのである。

大正七年六月二十七日印刷
大正七年七月七日發行

著者 海老名 彈正

發行者 福永文之助
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷者 村岡 徹三
東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷所 福音印刷株式會社
東京市京橋區銀座四丁目一番地

不許複製
定價壹圓七十錢

發行所

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警社書店
電話東京一五五七
電話新橋一五八七

海老名正著

三版發賣

基督教十講

四六判三五〇頁
定價 壹圓
郵稅 金八錢

- 第一講 ■ 豫言者より基督まで
 - 第二講 □ 原始基督教
 - 第三講 ■ 教父時代の基督教
 - 第四講 □ 中世紀の基督教
 - 第五講 ■ プロテスタント教
 - 第六講 □ 新プロテスタント教
 - 第七講 ■ 近代哲學と基督教
 - 第八講 □ 近代文藝と基督教
 - 第九講 ■ 近代政治と基督教
 - 第十講 □ 日本固有思想と基督教
- 【附録】 近代進化説と基督教

京都同志社々長 原田 助序
大阪島之内教會 神學士 山口金作著

史的耶蘇

菊判 五百五十頁
定價 一圓八十錢
送料 十二錢

共觀福音書之批評的研究

ナザレのイエスの人格と其思想を知らんと欲せば必ず共觀福音書につきて學ぶ所がなくてはならぬ。本書は即ち共觀福音書を最も科學的に研究すると共にナザレの耶蘇の人格及其思想を明かにせんとしたものである。
本書は最近獨、英、米等に行はれつゝある諸種の學説を紹介すると共に、著者自身の所信を最も大膽に又最も誠實に告白したものである、従つて是れ迄のイエス傳及福音書註釋書とは稍趣を異にした書である。

122J-13

325
296

■富永徳磨新著 [再版發賣]

有神論體系

菊判 五百三十頁
布裝英文索引添付
定價 一圓五十錢
送料 金十二錢

世界に於ける
新有神論
わが國空前
の著作なり

有神論は宗教の根本、骨髓なり。之が確立せざれば、宗教は不安の裡に存し、之にして真ならば、信仰は大磐石の上に立つ。而して宗教は忽諸に附すべからざるものとなる。著者は古今の宗教を究め、現在の哲學を取り、これらを綜合して、爰に有神論の體系を樹立す。その思想の清新、理義の明白、文章の暢達、しかも信仰の氣の卷中に溢るゝところ、例に依て著者獨特の面目。されば苟も、神明佛陀を信ずる人々の一讀を惜しむべからざる書なり。

終

